



警視庁歌舞伎町分室  
〈黒魔術師〉

谷恒生





## TOKUMA NOVELS

谷 恒生

警視庁歌舞伎町分室〈黒魔術師〉

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノノ一六 一〇五八〇五五

電話三五七三・〇一一

振替〇〇一四〇〇一四四三九二

©Kōsei Tani 1999 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

編集担当 吉川和利／販売担当 上村仕之・益子 光

ISBN4-19-850440-7

書下し長篇ハ  
トキオオレンス  
ノ警視村正

警視庁  
舞伎町分室

谷恒

館  
舞伎町分室  
学  
蔵  
工  
蘇



徳間書店

TOKUMA NOVELS







目次

第一章 連続暴行殺人

7

第二章 異常者の群れ

50

第三章 黒魔術師

92

第四章 美しき囹おとり

138

第五章 惨劇の果て

173

本文挿画・武田英希



# 第一章 連続暴行殺人

I

電車の疾走していく、音がひっきりなしにひびき、部屋はいつもがたかたと揺れている。

大久保駅ちかくの線路沿いの古ぼけたモルタルのアパートが住み心地のよいはずはない。

上條達夫はベッドに浅く腰を乗せて、右腕のシヤツをまくりあげた。サイドテーブルの上には水に似た覚醒剤シヤブの溶液を入れた小皿と注射器が置いてある。むろん、達夫が用意したものだ。

達夫は馴れた手つきで注射器に覚醒剤溶液を注入すると、右手の拳こぶしをつよく握りこんだ。浮きあがった静脈に注射針を刺す。ちよつと血がにじんだ。

ゆっくりとポンプを押す。覚醒剤が静脈に注入されていく。

達夫は一滴のこらず覚醒剤を静脈しんけつみやくに注射すると、注射器をそそくさとケースにしまい込み、キャメルカラーのジャケツトの内ポケットに入れた。サイドテーブルの小皿にはまだ覚醒剤溶液がかなり残っている。

達夫は左手首にはめてあるローレックスに眼をや

った。午前零時をいくらかまわっていた。あと一時間もすれば朱実が帰ってくる。

達夫はベッドに仰向けに転がった。もやもやと濁っていた頭がすっきりし、芯がしんと冷えた。

冷気の棘をはらんだ寒風がするどい唸りをあげて路面を這うように吹きぬけていく。

部屋は暖房のききすぎで生まぬるいサウナのようだった。

部屋は六畳一間で、ドアの脇にトイレと風呂がついている。

南側に窓があるが、このあたりはボロアパートの密集地帯で、陽のさすことはほとんどなかった。西の壁にセミダブルのベッドが置いてあり、北側に化粧だんすと化粧台が並んでいる。

もちろん、朱実の部屋である。住所不定で無職の上條達夫にアパートを借りられる社会的信用などあ

るはずもない。

達夫は一カ月ばかり前、新宿歌舞伎町のイメクラにつとめていた朱実を尾行して強引に部屋へ押し入り、強姦同然に犯して自分のオンナにしてしまったのだ。

この四年間、上條達夫はフーズクのオンナを食いものにして生きてきた。職業といえるかどうかは疑問だが、恐喝と路上強盗でカネを得ている。酔って盛り場をふらふら歩いているサラリーマンに因縁をつけ、殴りつけて財布を奪う。

拳には自信があった。

中学当時からボクシングジムに通い、十七歳でウェルター級の四回戦ボーイとしてデビューし、破竹の四連勝をつづけた。五戦目に日本チャンピオンの小林直樹に挑戦し、強烈な右ストレートを顔面に浴びてダウンし、意識不明となった。

この小林直樹との一戦で、達夫はボクシングを断念に追いこまれた。顔面に突き刺さった小林直樹の右ストレートが達夫の右眼の視力を剝奪したのである。

小林直樹はその後順調に成長し、今年の春、メキシコのホセ・マソーノと世界戦をたたかい、判定で惜敗した。

上條達夫の狐きつねのようなつりあがりぎみの眼が凶暴な光を発した。覚醒剤ヤブの効果で頭のなかがひどく冴え、体内に自信と活力がみなぎりだしたのである。

達夫はキャメルカラーのジャケットを脱ぐと、絹の派手な柄シャツのボタンをはずしながらベッドから降りた。冷蔵庫から缶ビールをとりだし、プルトップを引き開けた。ジュツと泡がこぼれる。

達夫は缶ビールをごくごく喉に流しこんだ。覚醒剤でただれた喉に冷えたビールがうまかった。

達夫は絹の柄シャツを脱ぎ捨てた。髪を茶髪にして、耳にエメラルドのピアスをつけ、首に太いゴールドチェーンをかけている。

上半身はだかになった上條達夫は缶ビールを飲み干すと、缶を握りつぶしてゴミ籠ごみかごにほうりこんだ。双眼が飢えた野獣のようにギラギラしている。体の奥にうずくまっている残酷なものが荒々しく動きはじめた。

上條達夫はベッドに腰を降ろすと、金のカルチェでマリファナ煙草に火をつけた。いがらっぽい煙が喉を押し通り、肺に充ちていく。松葉をいぶしたような刺戟臭しげきくさみがむしあつい部屋にただよう。

この二十二歳になる野卑で凶暴な若者は、油びかりするほどに筋肉質の体を持っていた。ハイヒールの音がちかづいてくる。

達夫の眼がサディスティックなぬめりを帯びた。

靴音が止まり、ドアがひらいた。

朱実が部屋に入ってきた。光艶のあるグリーン色のボディコンの上から毛皮のコートをはおっている。肩までの髪は金色に見えるような茶髪で、ロリータフェイスがチャームな女だった。

「暑いじゃん。暖房低くしたほうがいいよ」

そういいながら、朱実が毛皮のコートを脱いでハンガーにかけた。

達夫はベッドから腰をあげると、背後から朱実を抱きすくめた。

「厭いや、よしてよ。つかれてんだから」

朱実は身をよじって拒こぼもうとした。

達夫は両手で朱実の張りのある乳房をまさぐりながら、うなじに唇を這わせ、耳みみに熱い吐息をふきかけた。

「ああ……」

朱実の唇からかすれたような愉悅のうめきが洩もれた。達夫は朱実のボディコンのジッパーをひきおろした。黒いレースのベビードールがむきだしになった。

達夫は朱実をベッドへ凶暴に後向きに押し倒すと、ボディコンを荒はつぽく剃はぎとり、股間を隠している小さな黒のショーツをずりおろした。

「腰をあげろ。あげやがれ」

達夫が眼をぎらつかせて、わめいた。朱実が四つん這いになって怯おびえるように尻をつきあげた。

朱実の恥はずかしい部分が達夫の眼の前にあられもなくさらけだされた。達夫はサイドテーブルの上の小皿にのこっている覚醒剤溶液を手のひらと指にたっぷりとつけ、朱実の秘ひ処ちに擦すりこんだ。

「あっあっ、ああっ」

朱実が発情した女猫のように背中をよじり、四肢

をはげしく痙攣させた。焼鍔を当てられたような感覚が腔の粘膜を貫いて脳天に噴きあがり、全身に粟粒立つような昂揚感がわきたった。

「効くだろうが。上物のシャブってやつはとんでもねえ媚薬なのさ」

上條達夫はうるんだ眼のふちに卑猥な笑みをにじませると、四つん這いの朱実のボディに寄り添った。ベビードールの紐をはずしてずりさげた。耳朶になまあたかいた息を吹きかけながら、右手で乳首をつまんで揉み、左手で秘処をねっとりとなぞりあげた。

「ううん、ううん、ううん」

朱実が苦悶のように眉根を寄せ、はげしくあえぐ。達夫に性感の急所を責められて掘り起こされた快感が潮のように高まっていく。

達夫は秘処に愛撫を加えながら、ベルトをはずし、

ズボンをひきおろした。怒張して猛り狂ったペニスをひっぱりだすと、両手で乳房をにぎりしめながら、濡れて濃厚なおいをただよわせている朱実の秘処へ楔を打ちこむようにえぐりこんだ。

膣合独得の微妙な衝動とともに、達夫のペニスが腔の肉壁をおしわけて獐猛につきすすみ、深奥に達した。

達夫は背後からつけ根まで深々と朱実と膣合した。朱実の悲鳴がとまらなくなった。からだの中心部から波紋のようにひろがったエクスタシーが花火のように散りつづける。

「いく、いく、いくウ!!」

朱実はほそいあごをあげ、狂ったように頭を振った。汗で濡れた長い茶髪が波打ち乱れる。沸騰するような快感が爆け散った瞬間、朱実の頭の中が真っ赤になり、ひとりで呼吸が止まった。

鮮烈な喜悅の電流が脊髓をつらぬいてからだのあらゆる先端へと向かつて稲妻のように奔りぬけていく。朱実のウエストのくびれに鞭打たれるような痙攣がたてつづけに起こり、全身が仮死状態のようにうごかなくなつた。

「まだだ。まだまだ。朱実、死ぬほどいい思いをたつぷりと味わわせてやるぜ」

達夫は朱実のなかからペニスをひきぬくと、身体を仰向けにして、朱実の両脚をくの字におしひろげた。

覚醒剤とマリファナが達夫の熱力を温存させているのだ。麻薬は女を食いものにする達夫という不良のとおつておきの武器なのである。

朱実の女陰から白濁した蜜がにじみでて、白い内腿を雨だれのようにつたい流れていく。

達夫は獲物に食いついたけだものようにはげし

い息をはきながら、朱実の女陰に唇をおし当て、凶暴にむさぼつた。

朱実が長く尾を引く繊細な悲鳴をほとぼしらせたいつたん、ひきかけていた快感の波がふたたびはげしく泡立ちはじめたのだ。たちまち、身体の芯が焼かれたように熱くなり、腰のあたりに小さな痙攣が何度もはしつた。

「達夫、お願い、いれて、深く入れてよ」

朱実は哀願するように訴えると、腰をせりあげてせがんだ。

達夫は残忍な笑みを口のはしに浮かべると朱実の両腿をかかえて、でんぐり返りさせようにならせた。朱実が声にならないうめきを洩らした。女性の洋弓が奇妙なかたちにねじれて、ベッドがきしんだ。達夫はたくましく怒張しているペニスを朱実のうるおいすぎている局部におしつけた。朱実のその部

分は阻害する感じもなく達夫を迎え入れ、深々と誘いこんだ。

朱実の唇が絶叫のかたちひらかれた。達夫のペニスを包含する感覚があまりにも強烈だったのである。

この結合度の強さと膨張度のはげしさは、もとより、覚醒剤の効果によるものだった。

汗のにじんだ朱実の乳房とフレッシュな下腹部がはずみかえり、悲鳴がとまらなくなった。

からだの芯に高圧の電流が流れているような感覚のなかで、朱実はなにかが破壊されていくような錯覚にとらわれていた。甘い蜜につかっただ下半身が火にあぶられた蠟のように融けていく。エクスタシーを湧きださせて麻痺していたと思われる子宮の深みから、またしても濃厚な快感が放射された。

朱実の瞳が横一文字につりあがり、瞼の端が小刻

みに痙攣している。もはや、快美を訴える力も残っていないらしい。

達夫ははげしく腰を律動させ、これまでおさえてきた緊張を一気に解きはなつた。

「いくウ!! 死ぬウ!!」

達夫のペニスから精液が朱実の胎内にはとばした瞬間、朱実の全身が鳥肌立って硬直した。

達夫は肛門から脳天につきぬけていく痺れるような快感にひたりながら、はずんだ息をととのえた。

朱実は横顔を枕におしつけ、白目を剥いて虚脱していた。

静かだ。

そこには、雲をつきぬけたような空白があった。

電車の音も聞こえない。風音だけがかん高く吹きぬけていく。

幾許か経った。

朱実がはにかむように笑いながら、達夫の股間  
手をのばし、優しくにぎりこんだ。

「とつてもよかった。わたし、乱暴にされるのそん  
なに嫌いじゃないんだ」

朱実の手のひらにつつまれているうちに、虚脱し  
てふやけた達夫のペニスが力をとりもどしはじめた。

達夫は朱実の内腿の奥に顔を寄せた。眼の前に、

朱実の秘処がある。局部からあふれでた達夫の精液  
が朱実の汗ばんだ白い内腿に透明な跡をつけている。

達夫は朱実の汚れた臍こようんに昂奮し、唇をおしつけて  
つよく吸った。栗の花のような精液のにおいが鼻孔  
にまつわりついてくる。

「ああ……ああ」

朱実があえぎながらいった。

「達夫、汚れてるから、恥ずかしいよ」

達夫は濡れた秘処の上端のクリトリスを舌で転が

し、かるく咬かんだ。朱実の内腿がピクツと震えた。

達夫は股間から顔をあげると、疲れを知らぬ野獸  
となって朱実におおいかぶさっていった。

2

未明。

大久保公園のまわりにロープが張られ、制服を着  
用した警官が五、六人でまわりを警備している。

強力なサーチライトが大久保公園の暗がりを照ら  
しだしている。

植込みの陰に若い女性が横たわっている。まくれ  
あがったスカートとひき下げられたパンティてうかんが強姦  
されたことを物語るかのようであった。

「絞殺こうさつですね。首に、締めたロープの跡がのこって  
います」



